平成２５年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	モジュール型日本語教育教材の開発に向けた映像素材の教育資源化

研究代表者

氏名	所属	職名
谷部　弘子	留学生センター	教授

研究分担者

氏名	所属	職名
島田めぐみ	留学生センター	教授
伊能裕晃・坂田睦深・渋川晶・新谷あゆり・東泉裕子・宮本典以子	留学生センター	非常勤講師

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

本学留学生センターでは、外国人留学生対象の日本語教育を、日本語能力別に５段階に分けて実施しているが、2012 年度秋学期より、とくに初級後半レベルの「日本語総合」科目において、学習者の運用能力の向上を目指したカリキュラムおよび教材の改善に取り組んでいる。その一環として、映像素材（映画・ドラマ等）を活用したモジュール型教材の開発を行なうこととした。映像素材を外国語教育教材として活用すること自体はとくに目新しいことではなく、日本語学習の動機としてアニメ・ドラマなどいわゆるポップカルチャーへの関心があげられることが多くなった近年では、海外でも映像を活用した授業報告が多く見られる。しかし、その対象はある程度のストーリー理解が可能な中上級以上の学習者がほとんどである。本グループでは、映像素材をひとつの教育資源としてとらえ、中上級に限らず、幅広い日本語能力の学習者への応用が可能な場面を抽出して教材化することを目指している。学習者の興味・関心にあった映像教材を早い段階から活用することによって、学習への動機付けを高めるとともに、対人関係や言語行動の機能に着目させることができるのではないかと考える。

具体的には、まず、20 代～30 代の学習者に広く受け入れられそうなテーマであるか、教室での学習教材として適切な内容であるかなどの観点から映像素材を選定し、それぞれについて談話場面の分析と抽出を行った。検討した映像素材のうち５点については検索可能な形式で全発話を文字化した。

次に、本教材の対象学習者にとって必要かつ妥当であると思われる言語行動一覧（Can-do statements）の作成と検討を行い、平行して、映像による談話場面の活用を検討した。その上で、初級後半レベルの「日本語総合」科目における使用を前提とした教材案を作成した。現段階では、「カフェやレストランで希望を言うことができる」「知らない料理、飲み物、道具についての説明を聞いて理解できる」「落とし物や忘れ物をしたときに駅員や大学の職員に説明できる」「こまったとき、近くにいる人に、何かしてほしいとたのむことができる」など 13 項目について、共通の仕様による教材案が作成されている。これらは、2014 年度春学期に試用し、修正改善を加える予定である。

映像を初級段階でも使用するためには、登場人物の人間関係や談話場面のわかりやすさ、日本語発話の理解しやすさなどを考慮する必要があり、選定作業そのものに時間を要したが、今後も、本センターの日本語教育資源の一つとして素材を蓄積し、学習者の多様性に対応したさまざまな活用していきたいと考えている。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

映像素材の文字化資料や抽出した談話場面資料を本センターの教員間で共有するとともに、教材の試用改善後に、本教材開発の過程と成果を発表したいと考えている。